

## 爆発型半線型熱方程式の数値解析

電力中研 中川 友康  
電通大・情報数理 牛島 照夫

1. はじめに

$\Omega \subset R^n$  を有界な開集合, その境界  $P$  を滑らかとする。次の問題を考える。

$$(E) \begin{cases} \frac{\partial u}{\partial t} = \Delta u + f(u) & x \in \Omega \\ u(t, x) = 0 & x \in P \\ u(0, x) = a(x) \in C_0(\bar{\Omega}), & x \in \Omega. \end{cases} \quad t > 0$$

この解  $u(t, x)$  は,  $f(u)$  と  $a(x)$  に関する適当な条件のもとに有限時間で無限大になることが Kaplan [6], Fujita [4], Ito [5], Tsutsumi [9, 10] 等により知られている。

ここでは以下に定義する二種類の「爆発」解についての近似問題をおつかう。近似の方法は有限要素法による, ([8].)

定義 1 (Kaplan-Fujita の意味の爆発)。

$\lambda \in$  Dirichlet 条件  $\alpha$  下での  $-\Delta$  の最小固有値,  $\phi(x) > 0$   <sup>$(x \in \Omega)$</sup>  を

対応する固有関数とする。  $\int_{\Omega} \phi(x) dx = 1$  と正規化しておく。

$J(t) = (u(t, x), \phi(x))_{L^2(\Omega)}$  を考える。

$u(t, x) \in C([0, T], C_0(\bar{\Omega}))$ ,  $T < +\infty$ , が (E) をみたす古典解で

$\lim_{t \uparrow T} J(t) = \infty$  のとき  $u(t, x)$  は J 爆発 するといひ,  $T$

は J-爆発の爆発時刻といひ。

定義 1' (Tautsumi の意味の爆発)

$u(t, x) \in C([0, T], C_0(\bar{\Omega}))$ ,  $T < +\infty$ , が (E) をみたす古典解で

$\lim_{t \uparrow T} \|u\|_{L^2(\Omega)}(t) = \infty$  のとき  $u(t, x)$  は  $L^2$  爆発 するといひ,

$T$  は  $L^2$ -爆発の爆発時刻といひ。

$f(u)$  を

$$(1) \begin{cases} \circ f(u) \geq 0 \text{ および } f''(u) \geq 0, \text{ 任意の } u \in \mathbb{R}^1 \text{ に対して.} \\ \circ \text{ある正数 } C, \gamma \text{ が存在して} \\ f(u) \geq C u^{1+\gamma}, \quad u \rightarrow \infty \text{ のとき.} \end{cases}$$

とする。

$J^1$  は  $-2J + f(J) = 0$  の最大正根とする。正根をもたぬ場合は  $J^1 = 0$  にとる。次がなりたつ。

命題 1 (J 爆発の必要十分条件)

$f(u)$  は (1) をみたすとする。(E) の古典解  $u(t, x)$  が J 爆発するのにはある時刻  $t_0 \geq 0$  が存在して

$$(2) \quad J(t_0) > J^1$$

のときかつそのときにかぎる。

$J$ 爆発の時刻  $T$  は

$$(3) \quad T \leq t_0 + \int_{J(t_0)}^{\infty} \frac{dJ}{-2J + f(J)}$$

により評価される。

証明) (2)の必要は明らか。十分は、Jensenの不等式を用いて常微分不等式

$$(4) \quad \frac{d}{dt} J(t) \geq -2J(t) + f(J(t)) \quad t \in [0, T)$$

を導けばよい。また (3) は (4) からの帰結である。(証明終り)

$f(u)$  は、 $u \geq 0$  に対して

$$(5) \quad \begin{cases} f(u) \geq 0, & f'(u) \geq 0 \\ u f(u) - 2 \int_0^u f(u) du \geq C u^{2+\delta} \quad (\exists C > 0, \delta > 0) \end{cases}$$

とする。

$I(t) \equiv -\frac{1}{2} \|\nabla u\|_{L^2(\Omega)}^2 + \left( \int_{\Omega} f(u) du, 1 \right)_{L^2(\Omega)}$  を定義する。

命題 1' ( $L^2$ 爆発の必要十分条件)

$f(u)$  は (5) をみたすものとし、 $a(x) \geq 0$  とする。(E) の古典解  $u(t, x)$  が  $L^2$ 爆発するのはある時刻  $t_0 \geq 0$  が存在して

$$(6) \quad I(t_0) > 0$$

のときかつそのときにのみ成り立つ。

$L^2$  爆発の時刻  $T$  は

$$(7) \quad T \leq t_0 + \frac{1}{C^\gamma} (\text{mes}(\Omega))^{\frac{\gamma}{2}} (\|u\|_{L^2(\Omega)}(t_0))^{-\gamma}$$

により評価される。

証明) (E) から次が導ける。

$$(8) \quad \begin{cases} \frac{1}{2} \frac{d}{dt} \|u\|^2 = -\|\nabla u\|^2 + (uf(u), 1) \\ \left\| \frac{\partial u}{\partial t} \right\|^2 = \frac{d}{dt} I(t). \end{cases}$$

$$u(t, x) = \int_0^t \frac{\partial u}{\partial t} dt + u(0, x) \quad \text{だから}$$

$$\begin{aligned} \|u\|^2(t) &\leq 2 \int_0^t dt \cdot \int_0^t \left\| \frac{\partial u}{\partial t} \right\|^2 dt + 2 \|u\|^2(0) \\ &= 2 \left( \int_0^t dt \right) (I(t) - I(0)) + 2 \|u\|^2(0). \end{aligned}$$

これにより (6) の必要が出る。

十分は,  $I(t) > 0$ ,  $t \geq t_0$  が成り立つことに注意して

$$\begin{aligned} (9) \quad \frac{1}{2} \frac{d}{dt} \|u\|_{L^2(\Omega)}^2 &\geq C(u^{2+\gamma}, 1) \\ &\geq C(\text{mes}(\Omega))^{-\frac{\gamma}{2}} \|u\|_{L^2(\Omega)}^{2+\gamma} \quad (\text{Hölder の不等式}) \\ &\quad (t \geq t_0) \end{aligned}$$

により示される。

(7) は (9) からの帰結である。

## 2. 有限要素法のための空間の近似

$\{\Omega_h; h > 0\}$  を次の条件をみたす有限多面体領域の族とする。

$$(H1) \begin{cases} \Omega_h \subset \Omega \\ \Omega_h \supset \Omega_{h'} & \text{if } h \leq h' \\ \max_{x \in \Gamma_h} \text{dist}(x, P) \rightarrow 0 & \text{as } h \rightarrow 0. \end{cases}$$

ここに  $\Gamma_h$  は  $\Omega_h$  の境界とする。

定義 2 (三角形分割)

集合  $\mathcal{S}_h = \{S^{(k)}\}$  が有限多面体領域  $\Omega_h$  の三角形分割であるとは、

- $$\left\{ \begin{array}{l} \text{(i)} \quad S^{(k)}, k=1, 2, \dots, \text{ は非退化の閉 } n\text{-単体で, その総数} \\ \quad \text{が有限,} \\ \text{(ii)} \quad \bar{\Omega}_h = \bigcup_{S^{(k)} \in \mathcal{S}_h} S^{(k)} \\ \text{(iii)} \quad S^{(k)} \text{ の面は他の } n\text{-単体 } \in \mathcal{S}_h \text{ の面であるか } \Omega_h \text{ の} \\ \quad \text{境界の一部} \end{array} \right.$$

なることをいう。■

以下簡単のために添字  $(k)$  をはぶく。  $S$  の頂点を  $b_0, \dots, b_n$  とし, 点  $x \in S$  の重心座標を  $(\lambda_0(x), \dots, \lambda_n(x))$  とする。頂点  $b_0$  に  $S$  の部分領域  $B_{b_0(S)}$  を

$$B_{b_0(S)} = \{x; 1 \geq \lambda_0(x) / (\lambda_0(x) + \lambda_i(x)) > 1/2, i=1 \leq n\}$$

と対応させる。

ここで,  $\mathcal{S}_h$  のすべての  $S$  の頂点を次によ,  $\tau$  番号づけを

おす:

$\Omega_R$  の内部の頂点に対して;  $j = 1, \dots, N$   
 $\Gamma_R$  上の頂点  $E$   $j = N+1, \dots, M$ .

頂点  $j$  の「集中質量領域」  $B_j$  を  $B_j = \bigcup_S B_{B_j}(s)$  により定める。ここに  $\bigcup_S$  は頂点  $j$  をもつすべての  $n$ -単体にあたる和  $E$  ありわすも  $a$  とする。

頂点  $j$  ( $j=1, \dots, N$ ) に関して2種の関数  $\bar{w}_j(x)$  と  $\hat{w}_j(x)$  を次により、定める。

$\left\{ \begin{array}{l} \bar{w}_j(x) = B_j \text{ の特性関数} \\ \hat{w}_j(x) = \text{各 } S \text{ 上で線型にして } \hat{w}_j(b_k) = \delta_{jk}, k=1, \dots, N+M. \end{array} \right.$

$\bar{w}_j(x)$  の線型結合  $E$  元とする集合  $E$   $\bar{V}_a$ ,  $\hat{w}_j(x)$  の線型結合  $E$  元とする集合  $E$   $\hat{V}_a$  とする。つまり

$\left\{ \begin{array}{l} \bar{V}_a = \{ \bar{u}_a; \bar{u}_a = \sum_{j=1}^N \alpha_j \bar{w}_j \}, \quad \alpha_j: \text{実数} \\ \hat{V}_a = \{ \hat{u}_a; \hat{u}_a = \sum_{j=1}^N \alpha'_j \hat{w}_j \}, \quad \alpha'_j: \text{実数}. \end{array} \right.$

$\alpha_j = \alpha'_j$ ,  $j=1, \dots, N$ , なる  $\bar{u}_a \in \bar{V}_a$  と  $\hat{u}_a \in \hat{V}_a$  は互いに associate であるといひ, その対応  $E$

$\left\{ \begin{array}{l} K_a: \bar{u}_a \rightarrow \hat{u}_a \\ K_a^{-1}: \hat{u}_a \rightarrow \bar{u}_a \end{array} \right.$

とありわす。

次の3つのバーナハ空間  $E$  導入する。

$X: C_0(\bar{\Omega})$  に最大値, ル  $u$   $E$  入れた空間

$\hat{X}_R$ :  $\hat{V}_R$  に最大値ノルムを入れた空間

$X_R$ :  $\bar{V}_R$   $\cong$   $\cdot$

なお  $\hat{X}_R$  と  $X_R$  の各元は  $\Omega - \Omega_R$  で値 0 をとる ように  $\Omega$  全体へ拡張しておく。

作用素  $\tilde{P}_R$  を  $(\tilde{P}_R u)(x) \equiv \sum_{j=1}^N u(x_j) \hat{w}_j(x)$ ,  $\forall u \in X$ , により定めれば, 写像  $P_R = K_R^{-1} \tilde{P}_R : X \rightarrow X_R$  は  $X$  から  $X_R$  上への射影である。

### 3. 近似方程式

空間  $X_R$  での作用素  $A_R$  を

$$(A_R u_R, v_R)_{L^2(\Omega_R)} = -(\nabla \hat{u}_R, \nabla \hat{v}_R)_{L^2(\Omega_R)}$$

for  $\forall u_R \in X_R, \forall v_R \in X_R$   
 $\hat{u}_R = K_R u_R, \hat{v}_R = K_R v_R$

にて定義する。また  $X_R$  での非線型写像  $f_R$  を

$$f_R(u_R) = \sum_{j=1}^N f(\alpha_j) \bar{w}_j \quad \text{for } u_R = \sum_{j=1}^N \alpha_j \bar{w}_j$$

にて定義する。

(E) の weak form から

$$\left( \frac{\partial u_R}{\partial t}, \varphi_R \right)_{L^2(\Omega_R)} = -(\nabla \hat{u}_R, \nabla \hat{\varphi}_R)_{L^2(\Omega_R)} + (f_R, \varphi_R)_{L^2(\Omega_R)}$$

$\forall \hat{\varphi}_R \in \hat{X}_R, \varphi_R = K_R^{-1} \hat{\varphi}_R$

が考えられる。これから我々は2)の近似方程式を考へる。  
(半離散近似)

$$(E_R) \begin{cases} \frac{\partial u_R}{\partial t} = A_R u_R + f_R \\ u_R(0) = P_R a. \end{cases}$$

(離散近似)

$\pi = (\tau_0, \tau_1, \tau_2, \dots)$ ,  $\tau_n > 0$   $n=0, 1, 2, \dots$ , なる順序つき集合  
 $\pi$  を時間メッシュベクトルと名付け, これをもとに,

$$(E_R^\pi) \begin{cases} t_{n+1} = t_n + \tau_n, \quad t_0 = 0, \quad \tau_n > 0 \\ u_R(t) = u_R(t_n), \quad t_n \leq t < t_{n+1} \\ \frac{u_R(t_{n+1}) - u_R(t_n)}{\tau_n} = A_R u_R(t_n) + f(u_R(t_n)) \\ u_R(0) = a_R, \quad a_R = P_R a. \end{cases} \quad n=0, 1, 2, \dots$$

半離散近似解ならびに離散近似解の爆発と爆発時刻を定義  
1に準じて定義する。爆発時刻に共通の記号  $T_R$  を考へる。

#### 4. 爆発解のアルゴリズムと残存時間の評価

時間メッシュベクトル  $\pi$  のきめ方を考へる。J爆発を  
追う方法(これは Kaplan-Fujita 流, 略して K-F 流)と



$L^2$  爆発を避ける方法 (すなわち Tautumi 流, T 流) の二通りを示す。

次の量  $\tau_n$  を定義する。

$$(10) \quad \tau_n = \min_{1 \leq j \leq N} \left( \frac{\|\bar{w}_j\|^2}{\|\nabla \hat{w}_j\|^2} \right).$$

### K-F 流

$-A_n \psi_n = \mu \psi_n$ ,  $\psi_n \in X_n$ , の最小固有値を  $\lambda_n$ , 対応する固有関数を  $\varphi_n$  とし,  $\varphi_n \geq 0$ ,  $\int_{\Omega_n} \varphi_n dx = 1$  に正規化しておく。

$J_n(t) = (u_n, \varphi_n)_{L^2(\Omega_n)}$  を定義する。また  $-\lambda_n J + f(J) = 0$  の最大正根を  $J_n^1$  と書く。正根がないときは  $J_n^1 = 0$  と定める。

$\tau \leq \tau_n$  なる任意の  $\tau$  ( $\tau > 0$ ) をきめて固定する。

$$(11) \quad \begin{cases} \tau_0 = \tau \\ \tau_n = \begin{cases} \tau, & J_n(t_{n-1}) < J_n^1 \text{ のとき} \\ \min \left\{ \tau, \frac{J_n(t_n) - J_n(t_{n-1})}{-\lambda_n J_n(t_n) + f(J_n(t_n))} \right\}, & J_n(t_{n-1}) \geq J_n^1 \text{ のとき} \end{cases} \end{cases} \quad (n=1, 2, 3, \dots)$$

### T 流

$\tau \leq \tau_n$  なる任意の  $\tau$  ( $\tau > 0$ ) をきめて固定する。

別に  $d > 0$  なる任意の定数をきめて固定する。

$$(12) \quad \left[ \tau_n = \tau \times \min \left\{ 1, \frac{\alpha}{\left[ \|u_n\|_{L^2(\Omega_n)}(t_n) \right]^\gamma} \right\} \right]$$

$$n=0, 1, 2, \dots$$

離散近似解の残存時間について、命題 1, 1' に類似な次の評価がなりたつ。

命題 2.

(K-F 流のコントロールの下での残存時間)

ある時刻  $t_m$  で  $J_n(t_m) > J_n^1$  になると

$$(13) \quad T_n \leq t_m + \tau_n + \int_{J_n(t_m)}^{\infty} \frac{dJ}{-\lambda_n J + f(J)}.$$

(T 流のコントロールの下での残存時間)

$I_n(t) \equiv -\frac{1}{2} \|\nabla \hat{u}_n\|_{L^2(\Omega_n)}^2 + \left( \int_0^u f(u) du \Big|_{u=u_n}, 1 \right)_{L^2(\Omega_n)}$  と定義する。

ある時刻  $t_m$  で  $I_n(t_m) > 0$  になると。

$$(14) \quad T_n \leq t_m + \frac{1}{C\gamma} (\text{mes}(\Omega_n))^{\frac{\gamma}{2}} (1+O(\tau_n)) \left[ \|u_n\|_{L^2(\Omega_n)}(t_m) \right]^{-\gamma}.$$

証明) 命題 1, 1' に準じる。

## 5. 爆発時刻の収束

半離散近似解の爆発時刻  $T_h$  に対して次の定理がなりたつ。

定理 1

次の条件を仮定する。

- (i)  $h \rightarrow 0$  のとき  $\lambda_h \rightarrow \lambda$ , かつ  $\varphi_h \rightarrow \varphi$  in  $L^2(\Omega)$ .
- (ii)  $u(t)$  が  $T$  で爆発するとせよ。任意に固定した  $T' < T$  に対してある  $h'$  が存在して, すべての  $h < h'$  について  $0 \leq t \leq T'$  で  $u_h(t)$  が存在して
- $$\max_{0 \leq t \leq T'} \|u_h(t) - u(t)\|_{L^2(\Omega)} \rightarrow 0, \quad (h \rightarrow 0).$$

すると,  $\lim_{h \rightarrow 0} T_h = T$ .

(証明)  $T' < T$  は任意に固定する。(ii)により

$$(15) \quad \lim_{h \rightarrow 0} J_h(t) = J(t), \quad t \in [0, T'] \text{ と同様.}$$

このことより  $T' \leq \liminf_{h \rightarrow 0} T_h$ .  $T'$  は  $T$  にいくらでも近くとれるから

$$(15) \quad T \leq \liminf_{h \rightarrow 0} T_h.$$

次に,  $T'' = \limsup_{h \rightarrow 0} T_h > T$  と仮定しよう。  $J' \geq J_h^1$  と  $h_0 > 0$  なる  $J'$  と  $h_0$  が存在して

$$\int_{J'}^{\infty} \frac{dJ}{-\lambda_h J + f(J)} \leq \frac{T'' - T}{2}, \quad \forall h \leq h_0.$$

ところが (15) より,  $J_h(t') > J'$   $\forall h \leq h_0$  なる時刻  $t' < T$  がとれる。残存時間の評価式から

$$T_h - t' \leq \int_{J_h(t')}^{\infty} \frac{dJ}{-\lambda_h J + f(J)} \leq \int_{J'}^{\infty} \frac{dJ}{-\lambda_h J + f(J)} \leq \frac{T'' - T}{2}$$

$$\begin{aligned} \text{よって } T_h &\leq \frac{T'' - T}{2} + t' \leq \frac{T'' - T}{2} + T \\ &\leq T'' - \frac{T'' - T}{2} < T'' = \limsup_{h \rightarrow 0} T_h. \end{aligned}$$

これは矛盾, したがって

$$(16) \quad T'' = \limsup_{h \rightarrow 0} T_h \leq T.$$

(15), (16) より 定理 1 を得る。

半離散近似の  $L^2$  爆発, 離散近似の  $J$  爆発と  $L^2$  爆発についても同様の定理がなりたつ。ただし離散近似の場合は, 時間メッシュ  $\pi$  につき,  $\|\pi\|_{\infty} \equiv \sup\{\tau_i, \tau_i \in \pi\} \leq T_h$  を課し, 定理 1 の条件 (ii) に相当するものとして,

$$\max_{0 \leq t \leq T'} \|u_h(t) - u(t)\|_{L^2(\Omega)} \rightarrow 0, \quad h \rightarrow 0$$

がそのような  $\pi$  で  $\|\pi\|_1 \equiv \sum_{\tau_i \in \pi} \tau_i > T'$  なるすべての  $\pi$  に対して一様になりたつことを要請しておく。



半離散近似解  $u_h(t)$  につき次がなりたつ。

定理 2.

半線型項  $F$  (H3) とする (E) が  $[0, T)$  で一意な古典解  $u$  もつとせよ。対応する半離散近似問題 (E<sub>h</sub>) に  $u_h(t)$  とする。仮定 (H1), (H2) の下で, 任意に固定した  $T' < T$  に対して

$$\max_{0 \leq t \leq T'} \| u_h(t) - P_h u(t) \|_{X_h} \rightarrow 0, \quad h \rightarrow 0.$$

証明のためには次に準備する。

$u_h(t), u(t)$  はそれぞれ

$$(17) \begin{cases} u_h(t) = e^{tA_h} a_h + \int_0^t e^{(t-s)A_h} f_h(s) ds, & t > 0 \\ u(t) = e^{tA} a + \int_0^t e^{(t-s)A} f(s) ds, & t > 0 \end{cases}$$

と書きかえておく。ここに  $A$  は Dirichlet 条件下での熱方程式に対応する半群  $e^{tA}$  in  $X = C_0(\bar{\Omega})$  の生成作用素である。

次の事実がなりたつ。

補題 1. 条件 H2 の下で  $\| e^{tA_h} \|_{L(X_h)} \leq 1$ .

補題 2. 条件 H1, H2 の下で

$$\| e^{(t-s)A_h} P_h u - P_h e^{(t-s)A} u \|_{X_h} \rightarrow 0 \quad (\forall u \in X)$$

unif. in  $0 \leq s \leq t \leq T'$  as  $h \rightarrow 0$ .

この事実を,  $e^{(t-s)A_h}$  は  $e^{(t-s)A}$  に「 $K$  収束する」といふ。証明は [11]。

補題 3.  $H_2, H_3$  を仮定する。  $\exists r_1 > 0, \exists V_0 > 0$  に対して

$$\max_{0 \leq t \leq t_0} \|u_h(t)\|_{X_h} \leq V_0, \quad \forall h \leq r_1$$

が成りたつとせよ。すると  $u_h(t)$  は少くとも  $[t_0, t_0 + \bar{l})$  まで延長できる。任意に小さい正数  $\varepsilon$  を固定するとある  $K_\varepsilon$  がとれて

$$\|u_h(t)\|_{X_h} \leq K_\varepsilon, \quad 0 \leq t \leq t_0 + \bar{l} - \varepsilon$$

が成りたつ  $h \leq r_1$  に対して成りたつ。ここには

$$\bar{l} = G(V_0) \equiv \int_{V_0}^{\infty} \frac{dv}{F(v)}.$$

証明) 不等式  $\|u_h(t)\|_{X_h} \leq \|u_h(t_0)\|_{X_h} + \int_0^t F(\|u_h(s)\|_{X_h}) ds$  から出る。

補題 4.  $H_1, H_2, H_3$  を仮定する。  $\exists M > 0, \exists r_1 > 0$  に対し

$$\max_{0 \leq t \leq t_0} \|u_h(t)\|_{X_h} \leq M, \quad \forall h \leq r_1$$

が成りたつ

$$\max_{0 \leq t \leq t_0} \|u_h(t) - P_h u(t)\|_{X_h} \rightarrow 0 \quad \text{as } h \rightarrow 0$$

が従おう。

証明) (17) から,  $\exists C > 0$  がとれる,

$$\|u_h(t) - P_h u(t)\|_{X_h} \leq \gamma + C \int_0^t \|u_h(s) - P_h u(s)\|_{X_h} ds$$

$$0 \leq t \leq t_1$$

$$\begin{aligned} \therefore \gamma &= \|e^{tA_h} P_h a - P_h e^{tA} a\|_{X_h} \\ &+ \int_0^t \|e^{(t-s)A_h} P_h f - P_h e^{(t-s)A} f\|_{X_h} ds \end{aligned}$$

を得る。

補題2のK収束より  $\gamma \rightarrow 0$  as  $h \rightarrow 0$ . よって本補題を得る。

定理2の証明)  $V_0 = \max_{0 \leq t \leq T'} \|u\|_{X_h}(t) + \delta$  ( $\delta$  は適当な正数) とおき, 区間  $[0, T']$  を  $l < G(V_0)$  なる適当な正数  $l$  で等分割する。明らかに  $\|a_h\|_{X_h} < V_0$  だから補題3により  $\sigma_1$  の区間  $[0, l]$  で  $\|u_h(t)\|_{X_h}$  は  $h$  に無関係に有界, したがって補題4により収束する。このことより  $h_1 > 0$  が存在して

$$\max_{0 \leq t \leq l} \|u_h\|_{X_h} \leq V_0, \quad \forall h < h_1.$$

したがって  $\|u_h\|_{X_h}$  は補題3により区間  $[0, 2l]$  で有界であることが  $\forall h < h_1$  についてなりたつ。したがって補題4により  $[0, 2l]$  での収束がいえる。以下同様の議論をくりかえして, 結局  $[0, T']$  での収束が示される。 (証明終り)



離散近似解  $u_h(t)$  についても, 以下に

$$u_h(t) = U_h(t) a_h + \int_0^t \tilde{U}_h(t, s) f_h(s) ds$$

に表現すると, 前述と同じ論法がつかえる。ここに  $U_h(t)$ ,  $\tilde{U}_h(t, s)$  はそれぞれ  $e^{tA_h}$ ,  $e^{(t-s)A_h}$  を  $t$  方向に近似した近似作用素である。  $U_h(t)$  と  $\tilde{U}_h(t, s)$  につき補題 1, 2 に相当する事実が必要であるが, そのために時間メッシュベクトルにつき条件

$$\|\pi\|_0 \equiv \sup\{\tau_i, \tau_i \in \pi\} \leq \tau_h$$

が課される。

#### References

- [1] Ciarlet, P. G. and P. A. Raviart, Maximum principle and uniform convergence for the finite element method, Computer methods in applied mechanics and engineering, 2, 17-31 (1973).
- [2] Fujii, H., Some remarks on finite element analysis of time-dependent field problems, Theory and practice in finite element structural analysis, (Tokyo Univ. Press, Tokyo, 1973).
- [3] Fujita, H., On the blowing up of solutions to the Cauchy problem for  $u_t = \Delta u + u^{1+\alpha}$ , J. Fac. Sci Univ. Tokyo, 13, 109-124 (1966).

- [ 4 ] Fujita, H., On some nonexistence and nonuniqueness theorems for nonlinear parabolic equations, Proc. Symposium in Pure Math., AMS, 18, 105-113 (1970).
- [ 5 ] Ito, S., On the blowing up of solutions for semi-linear parabolic equations (in Japanese), Sugaku, 18, 44-47 (1966).
- [ 6 ] Kaplan, S., On the growth of solutions of quasilinear parabolic equations, Comm. Pure Appl. Math., 16, 305-330 (1963).
- [ 7 ] Nakagawa, T., Blowing up of a finite difference solution to  $u_t = u_{xx} + u^2$ , 1974-annual report of the trial research in large scale computation supported by Japanese Ministry of Education, 47-58 (1975).
- [ 8 ] Nakagawa, T. and T. Ushijima, Numerical analysis of the semi-linear heat equation of blow-up type, (pre-print).
- [ 9 ] Tsutsumi, M., Existence and nonexistence of global solutions for nonlinear parabolic equations, Publ. RIMS, Kyoto Univ., 8, 211-229 (1972).
- [10] Tsutsumi, M., Existence and nonexistence of global solutions of the first boundary value problem for a certain quasilinear parabolic equation, Funkcialaj Ekvacioj, 17, 13-24 (1974).
- [11] Ushijima, T., On the finite element approximation of semi-linear parabolic equations, (pre-print).